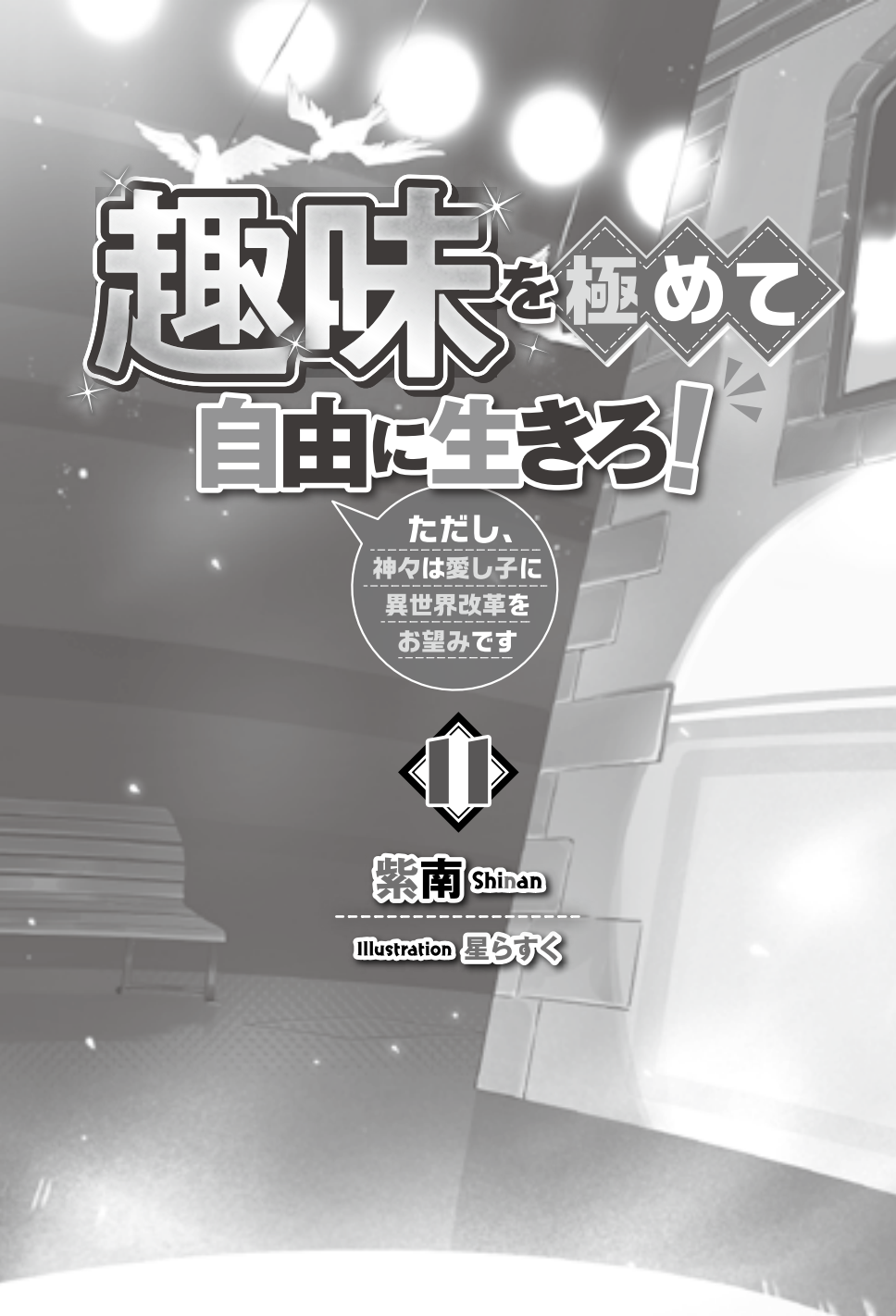




趣味を極めて 自由に生きる!

ただし、
神々は愛し子に
異世界改革を
お望みです



紫南 Shinan

Illustration 星らすく



リユーラ

『命』を司る第二神。
フィルズ達をたびたび
助ける。

リザフト

神々を率いる主神。
フィルズを異世界に招い
た張本人。



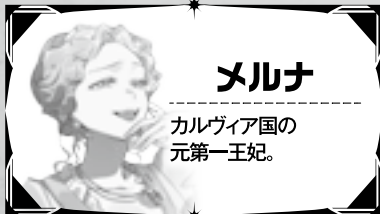
レナ

大聖女。
大商会の主でもある。



シエル

教会のまとめ役である
神殿長。



メルナ

カルヴィア国の
元第一王妃。



リュブラン

カルヴィア国第三王子。



クラルス

公爵家第二夫人でフィルズ
の母。天真爛漫な元流民。

フィルズ

公爵家第二夫人の子で、
モノ作りが大好きな少年。
優しいながらもやや毒舌。
セイスフィア商会を運営中。



レヴィリア

カルヴィア国の王妹。
ガーネル国の王妃となった。

エイルエイン

ガーネル国の元文官。
現在は国王となった。

主な登場人物 Main Characters

★ フィルズを取り巻く人々 ★

エントラール公爵家

リゼンフィア —— 当主。カルヴィア国宰相。
ミリアリア —— 第一夫人。
セルジュ —— 嫡男。フィルズの異母兄。
エルセリア —— フィルズの異母妹。

セイスフィア商会の 職員たち

出自も仕事も様々。
マグナ、コラン、カルバート、
ブラーナ、セラ、ユリなど。

教会

ラナラマ —— 第二席の聖女。

フィルズの母方の親族

リーリル —— 吟遊詩人。フィルズの祖父。
ファリマス —— 踊り子。フィルズの祖母。

カルヴィア国王家

ファスター —— 国王。
フラメラ —— 第三王妃。リュブランの母。
ファイラルーク —— 先王。
カティルラ —— 前王妃。
ユゼリア —— 第一王子。
カリュエル —— 第二王子。
リサーナ —— 第一王女。

守護獣や神霊獣

ビス^{あね} —— 姐さんバイコーン。フィルズの相棒。

◆ 三つ子のフェンリル ◆

エン(焰王) —— 長男。炎魔法が得意。
ギン(銀王) —— 次男。氷魔法が得意。
ハナ(華姫) —— 末っ子。結界が得意。

◆ ドラゴン三兄妹 ◆

綺羅(キラ) —— 長男。ツンデレ。
茜(アカネ) —— 長女。大人びている。
ジュエル —— 末っ子。宝石大好き。

動く!しゃべる!魔導人形たち

クマ

屋敷の管理や警備、
秘書までこなす有能クマたち。
ホワイト、ゴールド、ローズなど。

侍従のウサギ

セルジュ、カリュエル、
リサーナを護衛する。
クルフィ、トマ、ユマの3体がいる。

隠密ウサギ

通称ウサギ様。
治安維持や諜報活動を
担当する怖いウサギたち。

トラ

ファスターとリゼンフィアを
護衛する。シャルテと
ライデンなどいる。

ミッション① 懇親会^{こんしんかい}に参加しよう

踊りたくなるような音楽が朝から町に響いている。それに釣られて多くの人々が集まって来る場所が領主邸の隣。そこに、その領主邸よりも遥かに広い土地を占めている商会があった。この国、カルヴィアで最も勢いがあり、他の追従を許さない実績を持つセイスフィア商会の支店だ。

商会長であるフィルズはこの国唯一の公爵家の次男。第二夫人である流民の子だった。夫婦関係家庭環境を見直すためにもと、それまでの生活費や養育費を置いて、母と公爵家を出て商会を立ち上げた。

幸い、父が思い直したため、夫婦仲は改善されているし、険悪だった第一夫人とも今は姉妹のような関係を築いているが、未だ公爵家に戻る気は親子共々なかった。

『お待たせいたしました! さあ! 元キートル領在住のみなさああん?』
商会の中央にある大きな舞台の上にいるのは、フィルズの母のクラルスだ。商会の広告塔であり、

舞台上に立てば司会者としても優秀さを発揮する。流民は踊り子や吟遊詩人（ぎんゆうしじん）を生業（なりわい）としていた。小さい頃からクラルスは魅せる術（すべ）を知っていた。

今日も魅力的な笑みを浮かべながら手を上げ、そして、耳に手を当てる。すると、沢山（たぐさ）の音が応えた。

「「「はあああい！」「」」」

フィルズの前世の記憶や、過去に賢者としてこの世界にやって来た異世界の知識を持つ者達の研究により実現したモニターが、商会内の幾つかの場所に用意されている。そこにもクラルスが映し出され、カメラワークも素晴らしく人々の目を引きつけていた。

『そして〜！ 今日のために遊びに来てくれた！ みんなあああ！』

クラルスがマイクを片手に、もう一つの手を口に当てて、大きく呼びかける。すると、更に大きな歓声（きんせい）が上がる。

「「「おおおおおっ！！」「」」」

「「「クーちゃあああん！」「」」」

「「「ステキいいいっ」「」」」

多くのクラルスファンもちゃっかりやって来ていた。それも大勢。

野太い声、甲高い声。様々な声に応えるように、クラルスは手を振った。

『ようこそ！！ セイスフィア商会！ カルトナ支店へ！！』

ここは、元は第三王妃であるフラメラの実家、キートル伯爵家の領地だった。しかし様々な不正（ずさん）な領地管理がフィルズやフラメラの手で暴かれ、領主一家が捕縛（とら）されて半年近くが過ぎた。そして「カルトナ」という領名に生まれ変わり、領主も交代することとなっていた。

『今日は！ 新たな領主任命と、この支店のオープンを記念して！ 只今より！ 記念祭をはじめます！！』

「「「おおおおおっ！！」「」」」

「「「わあああああっ」「」」」

大歓声（たいかんせい）の中、花吹雪（はなふぶき）が舞った。

『では！ まずは領主様のご紹介です！』

キートル領の領主の評判はとても悪かった。だからこそ、一商会が新領主を紹介するという、あり得ないことを提案してみた。これは、フィルズの案だ。

『このたび、新たな領主様となるのは、成人前の方です。若く経験がないことから、どんな方が来るのかと不安に思っているかもしれません』

領民達は真剣にクラルスを見つめている。

『ですので、新領主様よりも先に、後見役の方をご紹介します！ ファイラルーク先王陛下（みかど）です！』

「「「「っ、ええ!?」「」」」」

領民だけでなく、誰もが驚いた。舞台袖からゆっくりと中央に歩き出て来るファイラルークに、舞台の側にいる観客達は、膝をついた。さすがに先王の顔は知っている。しかし、そんな中でもクルルスは変わらない。

『そして、新領主にはリュブラン第三王子殿下が就くことになります！』

「「「っ!!」」」

王族の前でこれ以上大きな声を出すことはできないと、ほとんどの者が手で口を押さえて息を呑む。だが、現れたリュブランを見て、セイスフィア商会を知る者達は、別の意味で息を呑んだ。

「っ、うそ……リュークくん？」

「リュークんだよね？ あれ……」

「うそうそっ。第三王子!?」

「無能だとか言われてた……あの？」

会場の貴族達は、これまで第三王子に持っていた印象との違いに驚く。先頃失墜した第一王妃のメルナの企みにより、リュブランは母であるフラメラと共に、無能な王妃や愚かな王子と周囲に認識されていた。民達の間でも、そんな噂が流れていたのだ。実際は、リュブランはメルナによって多くの学ぶ機会を奪われ、根拠のない誹謗中傷が広がっていただけだった。

城を出てフィルズのもとで働くようになったリュブランは、様々な分野に挑戦したことで、抑えられていた才能を次々と開花させていった。

リュブランがセイスフィア商会でもかなり上の人間だと認識している者達は、首を傾げる。第三王子と普段商会の職員として見るリュブランが結びつかなかったのだ。けれど、この場でクルルスが嘘を吐くはずもなく、先王が当たり前のように迎え入れるのを見れば、偽者だとも思えない。

「わ、私……この前、リューク君にこのメガネ……作ってもらったんだけど……っ、王子様にやってもらったってこと!?」

「リューク坊が王子……三級も間近だって……俺よか強かったんだが？ 第三王子って、剣も勉強もできないって噂の……?」

冒険者として活動している時のリュブランは、新人達の憧れで、中堅どころの冒険者達にとって嫉妬する方が馬鹿らしくなる相手。年配の実力者達には将来が楽しみな存在だった。

剣もろくに振れない出来損ないという第三王子の噂と、実際に知っているリュブランという人物との違いが、多くの者達を混乱させていた。

「え……でも、第三王子って……学園に通ってないけど……領主になるには、学園を卒業する必要があるはず……」

「そうだよな？ え？ 俺らと同級になるとか？」

眉間に皺を寄せながら、そんな話をしているのは、貴族の子息達だった。それを聞いたからではないが、クルルスが息子を自慢するように続ける。

『みなさんは、王都の学園に特例の卒業資格があることはご存じでしょうか？』

「なにそれ」

「特例？ 特別なことで？」

「特別な理由で卒業したのと同じになる？」

学園には通えないと思っっている平民達も、「学園を卒業しなければ貴族として認められない」という話を聞いたことがあるようだ。

貴族の子ども達も、それは小さい頃から重々親に言い聞かせられている。

「確か、庶子^{しよし}の子が、学園に通わせてもらってなくて、けど、当主にならなきゃいけなくなったから、成人してから学園に通ったとか聞いたことがあるんだけど……」

「大事なんだよな？ 学園に通ってるかどうか？」

「もしかして、そういう人のための措置があるとか？」

クラルスの話の続きが気になり、誰もが ある程度嘔^{きや}いたところで口を閉じる。クラルスはそれをいち早く察して、ざわめきが収まるとすぐに続けた。

『この特例では、一年をかけて全ての学年の試験を受け、その全てで百点満点中九十点以上を取る必要があります！』

学園長が代わり、教師達の意識も引き締められたことで、授業内容もしっかりしたものになった。必然的にテストの中身も洗練され、以前は満点が求められたが九十点まで基準は下げられている。

「それって……すごいのか？」

「九十って、九割合ってるってことだよな？ それって……」

『ちなみに、二年ほど前までの試験でも、在校生で六十点ほどまでが最高だそうです！ 一番下は……十点だとか……』

「『……』」

そんな成績でも三年通ったら貴族として認められるのかと思えば、誰もが文句を言いたそうにながらも固く口を閉じた。

『そんな試験、で・す・が・あ。リユー君は見事にこれをクリアしました！』

「すごい……すごいんだよね？」

「そうだな。アレだろ？ 授業を受けて六十点も取れないのに、自分で勉強して九十点以上取れたってことだろ？ 相当努力が必要だよな……」

人々の尊敬するような視線が、舞台の上のリュブランに集まる。

『リユー君は本来ならば、現在二年生！ ですが、既に三年卒業までの勉強を済ませて、試験も全て九十点台から満点を取って合格しました!!』

「え……満点とか……そんな点数、取れるのか？」

「……」

「私、点数の確認に行ったことないけど……半分くらいできなかった時もあったわよ？」

「どうやって、勉強されたのかしら……」

⋮

『ち・な・み・に』。貴族特有の賄賂とか、権力を使った点数の操作や、妨害などではできなくなっています。これは初代学園長の時代から、不正をさせないために、試験監督は学園長と、国王が任

ています。これは初代学園長の時代から、不正をさせないために、試験監督は学園長と、国王が任命した監督官、それと、神官さんおこなが行うからです』

「それ……絶対に不正なんて無理だわ……」

「疑うのも失礼ね」

.....

神が監督しているようなものだ。不正を疑うということは、神を疑うことになる。この世界では神官とは、その人柄も言葉も全て信頼すべき存在だ。

『と、いうことで、このカルトナ領民のみなさんは、それだけ優秀な領主様を迎えられるということです！』

魅力的なウインクを見せて、クラルスがお茶目に言えば、誰もが笑顔になった。

『更には、先王陛下がそれをご導いてくださいます！ふふつ。最悪な領主？金にがめつい領主？』

頭の悪い領主で長年我慢してきた甲斐かいがありましたねっ』

「あははははっ」

「確かにっ！」

「これはアレだな。ご褒美ほうびだなつ。耐えたご褒美だつ」

先々代までは良かった。そう何度も口にし、ため息を吐いた数十年。その全てが報むくわれたのだと領民達の顔は輝いていた。

リユブランが新領主になることを民達が受け入れ、歓迎してくれるようだ。

『私達セイフイア商会も、この頑張り屋な新領主様と共に、この領を盛り上げて参ります！ 成
人し、正式に任命されるまであと数年。先を楽しみに、もう少し、待つことにしましょうっ』

うんうんと誰もが微笑ましげに思いながら頷いた。

『さあ、リユ一君？是非一言お願いします』

『はい……あと数年、領主としての仕事をお祖父様から教わります。ゆつくりにはなるでしょうが確実に、先任の領主達に傷付けられ、壊されたものを治していければと思っています』

間違っていたことを正していくのは当然。けれど、それさえもできない時代があった。それに酷く傷付けられた者もいる。そんな人達の誠意に甘えておざなりになったり、得にならないと切り捨てたりしたものを拾い上げていく必要がある。それを、リユブランは正しく理解していた。

『それと……これだけは伝えておきます。私は、セイスファイア商会の職員であること、冒険者であ

ることを誇りに思っています。今の私があるのは、それらがあつたからです。それは、これからも捨てたくない……』

リュブランにとつてはとても大事なことだった。その時、建物の屋根に上がつて、舞台を見ている人物に気付く。それは、商會長であるフィルズだった。

フィルズはリュブランと目が合うと、しっかりと頷いて「頑張れ」と、拳^{こぶし}を握つて見せた。これに、リュブランは緊張を解き、笑みを浮かべた。

『ここに立つ前、商會長に言われました……』

一体何を言われたのかと、期待する観客達。このセイスフィア商會の商會長は謎の人物だと言われている。そんな人が何と言ったのかと、誰もが気になったようだ。

『ずっと悩んでいたんです……』

リュブランは悩んでいた。領主になれば、今のような生活はできなくなる。領主になると決めたが、時が経^たつにつれて、今持っているものを無くしたくないと思うようになった。

商會での生活も、冒険者としての活動も、全部城では与えられなかったものだ。絶望しながらも外に出て、全てを捨てると覚悟してから自分の力で手に入れたもの。それを易々^{やすやす}と手放すことはできなかった。

『領主になると決めたけど、今の私になるために手に入れたものも手放したくない。そう言つたら……』

誰もがリュブランの表情から、領主になるということが、辛い選択になるのだと察した。静かに続く言葉を待つ。

リュブランはしっかりと顔を上げて続けた。

『會長は、笑っていました。なら、ここで働くことや冒険者として活動することは、趣味にしたら良いだろうと』

「……しゅみ？」

「しゅみってなに？」

ここにいる者達の多くは、趣味という言葉聞いたことがなかった。誰もが生きるために働き、一分一秒をそのために注いで生きている。人によっては趣味になる裁縫や料理も必要だからやっているし、「ちょっとこれ作ってみよう」なんて考える余裕もないのが普通なのだ。

『私知ってる！ エントラール公爵領！ その人達が言つた。靴作^{かた}りが趣味だとか、お菓子作りがとか。体づくり？ がとか』

「どういうこと？」

「好きなことをするんだって。仕事がその延長だつて人もいるみたいだけど、お金のためとか生きるためとかじゃなくて、楽しむため？ えっと、人生を豊か？ にするための時間を持つことだって言つてたかな？」

「人生を豊かに……初めて聞いたわ」

考えたこともなかったと、聞いている人々の間で話は広がっていく。

『余裕がなければできないことだけど、やるべきことをやったなら、そうしたら、空いた時間で好きなことをしても誰も文句なんて言えないだろう？』と言われたんです』

フィルズを知る者達は、誰もがフィルズらしいと笑った。

『確かに。やるべきことだけやってくれたらなあ』

『うん。ってか、前の領主なんて、ほぼ毎日遊び歩いてたし』

『そうそう。それでもこの町は潰れなかったんだから、自由な時間は取れるわよ。空いた時間は自由でいいわよねっ』

前任が酷かったからか、とても寛容な意見が多い。良くはなかったが、この場合は良かったと言わなければならない。お陰で、リュブランが苦しまなくても済みそう。

『領主としての仕事には手を抜きませんが、同時に、この商会で働くこと、冒険者として活動することも続けていきます！』

『やったあ！』

『なら、リュー君にこれからも会えるのねっ』

『リュー坊がいなくなるのは寂しいなあ』

『冒険者に憧れて無茶するガキ共の目を覚まさせてくれる良い見本だし、やめられたらどうしようかとヒヤヒヤしたぜ……』

『おやつさんは、あのガキ共の面倒見るのが嫌なだけっしょ』

『おいっ』

そんな声が聞こえ、リュブランは嬉しそうに笑った。認めてもらえたことで、リュブランも今までの悩みがかなり軽くなっただろう。

クラルスが楽しそうに引き継ぐ。

『うんうん。リュー君はもうこの商会になくてはならない人だしねっ。それに、冒険者をやってる領主なら他国にも結構いるもの。商会を持つている領主もねっ』

『え……そうなのですか？』

『「「「えっ!?!」」」』

リュブランが目を見くする。同じように、聞いていた客達も驚いている。

『冒険者をやってる領主なら、リュー君も知ってるじゃない。ほら、辺境伯の』

『あっ！』

『商売を生業にしている国なんて、ほとんどの領主が商会長も兼任してるし、この国でも、商家から爵位持ちになった領主がいるわ』

『確かにそうだな。店頭に立つ領主もいる。下手な変装をしていたがな』

『っ、え、じゃあ……』

先王ファイラルークもクラルスを肯定したことで、リュブランに限らず、領主が商会で働くのも

別に構わないのではないかと誰もが納得していく。

『みなさんも納得できましたよね？ 領主様が冒険者でもいいかー！』

「[[[[いいよー！]]]]」

「[[[[いいぜー！！]]]]」

『領主様がたまに店員になっていてもいいかー！』

「[[[[いいですー！]]]]」

「[[[[いいぞー]]]]」

ノリが分かっているお客達だ。クラルスの日頃からのパフォーマンスもかなり浸透してきたようだ。

『結論も出たことで！ リュー君！ おめでとう!! このカルトナ支店の支店長に決定しました!!』

『えっ!? 支店長!? 私が!?』

『はい。リュー君が領主やりながらも店に立つって決めたら任せる、って会長さんから』

『っ!! そんな……本当に?』

『そうよ。あ、あと、ルーク様のお店も用意しました。喫茶店出来てます。店のマスターになるのお願いしますね!』

『な、なんとっ』

先王ファイラルークは、以前は歩くこともままならなかった。それがフィルズのもとで健康が改善されたことで、隠居生活を思う存分楽しむと決めたいらしい。そして、見つけた趣味がお茶だった。フィルズから『喫茶店』の構想を聞いたファイラルークは、その店主になることを夢見ていたのだ。それがこの支店で叶うことになる。リュブランの後見を引き受けてくれたことに対するフィルズからのお礼だった。

『この支店で上手くいったら、他の支店にも出店しようということだそうです』

『おおっ。うむ。誠心誠意務めよう! もちろん! リュブランも立派に領主と支店長が兼任できるように後押しするからな!』

『お祖父様……っ』

これでファイラルークは全面的にリュブランをバックアップしてくれる。リュブランにはもう逃げ場はない。

「フィル君……最初から……」

リュブランがちよっと恨めしげにフィルズがいる場所に目を向けると、サムズアップで返された。これは決定だ。ならば覚悟を決めるしかない。

『分かりました。やってみます!』

『っ、新しい領主でこの支店長であるリュー君に拍手!!』

「頑張ってー」

「リユー君ならできるよ」

「頑張れよ」

多くの人々に祝福され、リュブランはこの日、支店長に就任した。

リュブランが支店長兼、次期領主として発表されてから一週間が経ったこの日。カルヴィア王都の王宮には貴族達が集まっていた。

今日は、次期領主や騎士団に入る者達など、主に学園を卒業した子ども達の顔見せのための懇親会のようなものが行われる。

学園在学中の子ども達も必要とあれば参加するが、入学前の子どもは参加できない。

婚約者のいる子ども達は、初めて公式の場でパートナーを伴って参加することになり、家同士の繋がりを示せる紹介の場でもある。

卒業資格があることを示すため、卒業生達は、資格章である小さなブローチを胸元に付けることになっている。これにより、卒業資格が取れなかった者や、まだ在学中の子ども達との区別ができた。

「ねえっ。さっき、セイスフィア商会で見える方をお見かけしたのですけれど、今年の卒業資格章を付けていらしたの……どうのことかしら……」

「わたくしも見ましたわ。騎士のような方ですわよね？ お母様が言うには、学園長とご一緒にい

るところを見たことがある方だって」

「まあっ。まさか、隠し子かしら……」

「学園長はお子様がいらしてもおかしくはないお年と聞きますけれど……あの方が女性とおられるところなんて想像できませんわ」

現在の学園長はシビル・ラト・ルクエ伯爵^{はくしや}。家柄ではなく個人として伯爵位を持つ人物で、独身を貫いている。女性が苦手というわけでもなく、ただ結婚に興味のない人だ。性格は明るく、見た目も良いが、独特の雰囲気がある。

「そうですわね……ですが、養子という可能性はあるではありません？」

「ありそうですわ……」

そんな話をする少女達のグループは、仲のいい卒業生達のようなだ。

そして、別のところでは、少年達が固まって、また別の人物について話していた。彼らの視線の先には第一王子ユゼリアと第二王子カリユエルの異母兄弟、そして青年がもう一人いた。

「あそこ……カリユエル様とユゼリア様がいる所……あそこにいるの……第三王子ではないか？」

「っ、そうなのか!？」

「亡くなったと……」

「いや、騎士団を創り、出て行ったのは確かだが、亡くなつてはおられないと聞いた。どうやら、教会の保護認定を受けたらしい」

「え！ なら、危ない立場だったということか……メルナ妃が実質、幽閉されたことで、安全だと確認された？」

「それで戻ってこられたのか……ん？ お、おいつ。アレ、卒業章を付けてないか？」

「本当だつ。いや、だが、確か第三王子は私達より二つ下だったはず……」

「そうだ！ 妹と同じ年だと……だが、私達と同じ物だよな？」

その年によって、ブローチの卒業章のデザインは違う。直近五年のものとは、絶対に被らない意匠になるらしい。

「どうやって手に入れたんだ……」

「今の学園長は、不正なんてさせないだろ……」

「そうだな。お陰で俺達も卒業が危うかったし」

「……自由登園日が消えたもんな……」

「[[……]]」

今思えば、学園長にシビルが就いてから、少しずつ学園の教師達の顔つきが変わっていった。親の名を出して、成績などに便宜を図ってもらっていた者達は、揃ってそれができなくなったのだ。

「第一王子殿下が生徒総会で告発してから変わったよな……」

「ああ……」

一切の甘えが許されなくなったのは、その時からだと少年達は思い出す。

「けど……良かったのかもな。俺達よりもっと酷かった奴らは、父親が捕まったり、一家で平民になったのもいたし」

少し前、不正などが一挙に告発され、多くの貴族達が肅清された。これにより、学園に通っていた子ども達も何人か学園から去ることになった。そうした子の親は傲慢で、当然ながらその子も同様だった。家ごと処断されたのは、奇遇にもそうした子ども達ばかりだったのだ。あとは爵位を落とされた家門が多く、その場合は学園に残ることができた。

断罪され、家がなくなつた者の中には、家門の責任を取ると誓約した上で、学費を借金して学園に通う者もいる。彼らは、平民枠で騎士や文官を目指すことになる。今後の活躍によっては、家門の再興もあり得るかもしれない。

因みに、逆に優秀さや実直さを買われ、爵位が上がつた家も多かった。

「私達は、それよりもマシだったということだな」

「……本当に、平民にされるとか……あるんだなって思つて怖くなつたもんな……」

それから生徒達は、必死で勉強をするということを知つた。

「勉強も、やってみると意外と面白いものだつて気付いた俺……頑張つた」

「[[頑張つた]]」

うんうんと互いに頷く。するとそこで、入り口付近に出来た人だかりに目が向いた。

「なんだ？ 誰だろ」

「っ、おいつ！ フィルさんがいるぞ！」

「なに!？」

「フィルさんって、あの、三級冒険者の!？」

「なんでいるんだ!？」

興奮気味に思い出すのは、フィルズのこと。課外授業の時には、年下の、それも冒険者ということもあり、受け入れ難かった。しかし、巧みな話術と、自分達にはない見識の広さに嫌でも気付かされ、その強さも垣間見たことで、授業が終わる頃には、誰もがすっかり態度を改めた。

見下す対象から、嫉妬の対象に、そして憧れへと変わったことで、しっかりとファンになっていたのだ。

セイスフィア商会が学園内に出店している売店で顔を合わせれば、まだ反発していた者達が学園の課題をフィルズに見せ、自分達には敵わないだろうと思ひ知らせようとしていた。

彼はそれをあつさり返り討ちにし、更に学園の教師よりも分かりやすく指導までしてみせたことで、貴族の少年達は自らがいかに小さく狭い世界で生きてきたのかも理解した。

それに気付けた自分が誇らしいと、卒業生達の顔つきは変わっていった。この時には、フィルズは完全に憧れの存在になっていた。わざわざフィルズの顔を見ようと、卒業後にセイスフィア商会の常連になった者も学年の半数を超えている。

「なあつ、もしかして、どこかの貴族の子……とか？」

「あつ、ユゼリア様達がっ」

フィルズは小柄であるため、人が集まると見えなくなる。このことは、本人に聞かれるようなへまはしないよう、注意している。

ユゼリアとカリユエル、リュブランだけでなく、少し遅れて第一王女リサーナやユゼリアの婚約者であるブラーナも駆け寄っていった。そこだけ、子ども達が集まっていくため、大人達も否が応でも注目することになる。

それは会場に入る一時間ほど前のことだ。

今回の王宮での懇親会に、フィルズは正式に参加する必要があった。

「それが卒業の認定章なんだね？ すごい細かい……」

フィルズが行くならと、二年生になった兄のセルジュも一緒に参加することになった。一仕事終えてから行くと言ったので、開始時間ギリギリに王宮に着く予定だ。

今は馬車で王宮に急いでいる。同行者はセルジュだけだ。

「今年の認定章は、特に手が込んでるみたいだな。まあ、俺らのせいらいけど」

「卒業認定試験での合格が初なんでしょ？ リュブランもマグナもすごいよ！」

「ああ」

今回、学園に在学することなく、試験を受けて卒業認定の資格を得たのは、フィルズとリュブラ

ン、そして、無理やりリュブランと二人で受けさせたマグナだ。

マグナはかつて問題の多かった男爵家の嫡男^{ちやくなん}。両親も弟も、使用人の多くも捕縛され、散り散りになり、領地は公爵領に接収された。マグナは彼らの不正を告発したこともあり、リュブラン同様に教会に保護された。その後、フィルズの商会で働き始め、自己肯定感の低かった彼にフィルズは様々なことをさせた。それらが実を結び、頼りになる青年になっていた。

「やっぱ、マグナも受けさせて正解だったな」

「マグナって、最近は特に気配消すのが上手いから、リュブランの陰に隠れて分からない時が多いけど、結構優秀だね？」

「まあな。ヴィランズが養子にするくらいだし」

「それだよ！ 知らなかったんだけどっ！」

ヴィランズは元王国騎士団の団長。しかし、片腕を失ったことで、辞職し、その後は公爵領の騎士達をまとめてくれていた。現在はフィルズのお陰で義手をつけ、かつての強さも取り戻している。「あいつ、話さんしな。それにちよい鈍感だ。普通にヴィランズに跡継がせようと狙われてるけど、それにも気付いてなさそうだし」

マグナは、生い立ち^{おた}故か、褒められること、評価されることに未だ慣れていない。自分が強いはずがないとか、勉強ができるはずがないと思いつ込んでるのだ。結果が出てもまたまどうと言いつ張り、実力とは認めない。そろそろ、フィルズの祖父母、リーリルやファリマスが言い聞かせる

ことになるだろう。

「リュブランの後ろに上手く隠れすぎだよ……三級試験の話も出てるみたいだし」

「だな」

リュブランの実力が目立つため、マグナも冒険者としては一流と認められる三級間近だと知る者は少ない。だが、実際に二人でパーティを組んで依頼を受ける様子を見れば、抜群の連携を目にすることが出来るだろう。マグナも間違いなく実力を持っているということだ。

「そういえば、フィルは二級だった？」

「どっから聞いた？」

「ファリマス様。一級もすぐだろうねって、嬉しそうに笑ってた」

「そっか。まあ、リュブラン達にも追いつかれそうだし、さっさと上がるよ」

「うん。三級は降格もあるけど、二級に上がるのに期間とかは特にないんだってね」

「ああ。三級が境目なんだよ。そこまで止まりか、上に行けるかのな」

貴族の口車に乗って、容易く^{たやす}転がされるような者は、その先に行けない。三級までは、何よりも実力がものを言う。しかし、三級に上がってからは中身が重要だ。

英雄とまではいかなくても、頑張れば手が届くかもしれないと思えるヒーローでなくてはならない。だから、査定も厳しくなる。

大半は、三級になればなった者勝ちと思って油断する。そこで調子に乗って落とされる。降格し

「た者は、まず再び上がることはできない。」

「確か、課外学習の時にやらかした冒険者の人達、四級に落とされたんだよね？ 恨まれたりしない？ 捕まえたの、フィル達でしょ？」

学園の課外学習で、フィルズを含めた三級の冒険者達が護衛に付いたのだが、彼らは報酬に釣られて生徒達を危険に晒したのだ。これにより、降格となった。

「あれか。あいつらなら、ばあちゃんにシメられてカルトナの自警団にこの前放り込まれたぜ？」

「カルトナって、リュブランの？ 自警団？」

「ああ。安定した収入の方が安心だからとか言ってた。なんか、金で釣られたのが余程こたえたみたいだな。『最低限のお金でお願いします!!』って土下座された」

「……どんな指導を受けたのか気になるね……」

「だな……」

武神という別名で呼ばれるファリマスがどのようにシメたのかは分からない。分からせ方がとても気になるが、フィルズもセルジュも気になっても、ファリマスを前にして実際に聞くのは怖くてできなそうだ。

そんな話をしながら、少し寄り道もして、王宮に着いた。

会場に入ると、すぐに顔見知りの学園の生徒達に囲まれた。

「フィルさんっ。お久しぶりです！」

「あのっ。フィルさん……その記章……」

「同じですよ？ どうして」

年齢までは確認しないが、学園に通ってはいないのだから、不思議に思っただけだ。

「ああ。リュブランもマグナもいるし丁度いい。俺達は、卒業認定試験を受けて合格したんだ」

「「えっ!？」」

「あの、試験を全部受けて九十点以上取らないといけないっていう試験ですか？」

生徒会長でもあった男爵子息。今は二つ上に陞爵して伯爵子息になっている彼が、驚愕しながら問いかける。

「そうだ。来年からは、貴族籍のある者以外も、試験を受けられるようになる。平民を見下してる、ヤバいぜ？」

「っ、そんなっ」

「あの試験で九十点なんてっ、無理よー！」

「あり得ない！」

無理無理と言う生徒達。そこに、シビル学園長が顔を出した。

「おやおや。実際に彼らは、あなた方が五十点がやつとのもので九十点以上を取りましたよ？ それも独学です。あなた方には教師もついているのに、どうなっているんでしょうねえ」

「「「っ……」」」」

途端に子ども達は黙ってしまった。

「学園長……祝いの席だぞ」

「いやあ。だってねえ？ リュブランくんやマグナくんの勉強も、あなたが見たのでしょうか？ フィル君の言うことなら聞く生徒達も多いですし、最近、教師達が是非とも教師として来てもらってくれと煩いんですよ？ 毎日のように嘆願が……」

「え？ 嫌だし」

「ですが、フィル君。全部の試験で満点でしたし」

「「「ええっ!?」」」

これには、周りで聞き耳を立てていた大人達も驚く。聞いていたことがすっかり分かる表情を見せていた。

「そりゃあ、答えがない問題でなければ正解できるだろ。出題範囲なんてきっちり決まってるし。」

もう少し意地の悪い問題もあって良かったよな。引っかけ問題くらい出してくれよ」

「間違えさせようなんて考えて問題作りませんよ!?」

「だから応用利かねえんだよ」

「……なるほど」

「「「ええっ!?」」」

学園長が納得したことで、今後引っかけ問題や応用問題が出るようになる。

そんな中、懇親会が始まるうとしていた。

まず、宰相であるリゼンフィアが出て来た。その後にファスター王が一人でやって来る。その護衛として、リゼンフィアの相棒の魔導人形のライデンと、ファスター王のシャルテが成体のサイズで付き従っていた。二体ともフィルズの作ったものだ。今は堂々とした大きな虎の姿をしているが、装備変換の応用で、子猫のような姿にもなる。

いつもは甘えたなライデンも、シャルテ同様に高貴な猫のように見えた。実際、見かけ倒しではない攻撃力も持っている。

「おおっ。相変わらず、優雅ですなあ」

「ええ……シャルテ様など特に、威厳ある女王のようです」

貴族達は、ファスター王の相棒のシャルテにも敬意を払う。同時に、少し羨ましくも感じていた。王達が定位置に着いたところで、懇親会が始まった。

今回の一番の主役は、今期の卒業生達だ。学園の卒業から懇親会まで数ヶ月時間を置いており、それには理由がある。第一に、生徒達が卒業してからの生活に慣れるまで待つため。第二に、各自が親交を持つべき者達を、それぞれの家門で確認するための時間を見込んでいる。

第三に、学生時代の友情を家の繋がりとするかどうかを、当主と話し合う時間を設ける意味もあった。

「いやあ。今回ほど気持ちが悪く思える集まりは初めてですなあ」

「ええ。本当に。派閥がどうか、過敏になる必要もない」

「新興の貴族家も多いですしなあ」

「あの辺は、初めて見る」

「ああ。あそこは西の、元伯爵家の所の商会の……」

「あの方は、騎士の……」

大人達が、新たな繋がりを見極めるために情報交換をしながら忙しくしている中、卒業生達が一
人一人、王への挨拶をしていく。

「これよりは一貴族として国に貢献して参ります」

「うむ。励むように」

「はい」

それぞれ、定型文や意気込みを口にし、王に頭を下げる。

「父に代わり、改めてこの場でかつての家門の愚行を謝罪いたします。その責を胸に私は騎士となり、今後国に貢献いたしたく存じます」

「この先、苦勞があるだろう。親の責を背負わせることになるが、折れず前を向いてほしい」

「はっ！ お言葉、胸に刻みます！」

中には、家門が断絶した家の者もある。だが、今期の卒業生達はセイスフィア商会の尽力もあり、

現実を受け止められる者達ばかり。恨むのではなく、前を向き、寧ろ父や母をきっぱりと切り捨てて新たな人生を歩み始めていた。

本来ならば次期当主として在った者達は、騎士になったり、親戚の養子になったり、平民として生きる決意をしたりしている。

「これよりは平民となりますが、いずれ試験を受け、文官を目指す所存でございます」

「ああ。戻ってくることを待ってよう」

「はい！ 必ず！」

貴族が減ったと一口に言えば簡単だが、その影響は大きかった。個人で爵位を持った文官達や武官達の中にも、処罰された家門に協力していた者がおり、それらも処分したため、当然官僚も減っていた。

その補充のため、今年から平民にも広く募ることとなった。孤児の中には神官達から教育を受けた者もあり、そうした優秀でやる気のある若者達や、家族に連座して処分された者達が試験を受けて、官として入ってきている。

因みに、この試験はフィルズを含め、リゼンフィアやファイラルーク、学園長のシビル、神殿長といった国の首脳陣で検討した結果、全ての文官、武官が受けるものとして作った。

既に官だった者達も、落第点をとった場合は学生のように一所に集められて勉強させられる。貴族達のコネで入った者も多いため、そうした者の多くは、能力不足での解雇もあり得る。

試験は毎月行われ、合格するまで職場に戻さず、実力に見合った位置に置かれる。それまでの上司が、見習いにまで落とされている場合もあった。しかし、そんな場合もバカにされることはない。各役職別でも試験があり、やる気と知識さえあれば、一番上まで上り詰められるのだ。余所見よそみをしている余裕など誰にもなかった。

頑張った分だけ評価されるのだから、他人など気にしていられない。

この頃は、自分に合った場所を探り当て、そこに腰を落ち着けようとする者達が増えてきた。判断が早い者達は、適度に責任があつて、実力よりも少し下のいい具合の椅子を見つけて、温め始めている。そんなずる賢い面々が、暢気に懇親会を眺めている者達だ。

「いやあ。やはり、これくらいがいいよね。一番上なんて、疲れるだけだし」

「そうですねあ。あの頃は、家に帰る時間も満足に取れていなかったと、この頃はよく思い知らすよ」

「それです！ 娘や息子が、私にだけ冷たくて……他人みたいに……」

「仕事一色でしたからなあ。はははっ」

「野心いっぱい、今一番上にいる奴の顔を見るとねえ。笑ってきますよ」

「そうそう。こつちを悔しがらせたいのは感じますけど、どおつてことないですわ」

「本当に。得意げな顔をしてくるのを見ると、笑いがっ……ふふふっ」

「まあ、野心だけではやっていけないと、そろそろ気付くでしょうがねえ。はははっ」

「確かに、確かに」

彼らはかつて各部署のトップだった面々だ。試験官に神官がいるため、手を抜くことはできないが、上官の試験を受けないという選択はできる。よって、ほどほどの立場の試験を受けてそこまでにした者達だった。

しかし、そういった人達ほど、人格的にも優れている。再び上司になってほしいと思う者はいた。「……まさか、そんな理由で試験を受けないと……」

「私は！ あなたの補佐官に再びなるつもりで、上官試験を受けたのですよっ！」

「下の者達の質も上がっているんです。以前のような仕事量にはなりませんよ。ちゃんと帰れます！ 帰れるように私がします！」

「楽を覚えられたと？ 試験さえ受けられるようにすればこつちのものですよね？」

「「「っ、お、お前達……っ」」」

かつての補佐官達に話を聞かれていた。

元上司達が追詰められようとしていたその時、セルジュとカリユエルが首を突っ込む。

「あ、フィル君や神殿長の言った通りになってるんだね」

「人望のある上司か。素晴らしいね。うん。確かに、遊ばせておけないね」

「あ、あの？」

「第二王子殿下？」

突然の二人の乱入に、大人達は戸惑う。そんな中、カリユエルは補佐官達に言った。

「嘆願書を出せば良い。実力に見合った位置に就いてもらわないと困るからね。遅かれ早かれ、こういった、有能で頭の良い人達が手を抜き出すと予想されていたんだよ。だから、上は嘆願書制度を作る予定らしい」

「『嘆願書制度……？』」

「『あの人は仕事できるけど、性格最悪』とか、『あの人は仕事できるから、もう少し上の資格取って欲しいな』とか、『試験ではできただろうけど、こいつ現場では役に立たねえな』とかいう人に、見合った試験を受けてもらったり、監査にかけたりすることができるようにするんだとか聞きましたよ？」

「『っ!!』」

続いたセルジュの説明に、一同は目を丸くする。

「きちんと正しい場所に人員を、なるべくなら無駄なく就けたいからって言ってたよね」

「ああ。本当に、フィル君には頭が下がるよ」

「うんうん。やっぱりフィルはすごいね！」

「ということで、十人以上の署名と、正式な嘆願書を作れば、この人達は試験を受けるしなくなる。神官様の前で手は抜けないものね」

「『っ、うっ……』」

「『すぐに!』」

「お、おいっ。待て」

「そんなっ。逃げ道がっ」

「じゅ、十人なんてそう集まらんだろ……」

「いや、まさかここで集める気じゃ……っ」

「『待ってくれっ』」

「『ふんっ』」

かつての上司と補佐官達の攻防が始まっていた。

「ふふっ。何アレ。ものすごく楽しいことになってるっ」

「土下座したな……そんな上に立つのは嫌なのか？」

「泣き脅しが効かなさそうな人達だよ。あ、振り切った」

「おや。家族会議が始まったようだ。あの補佐官達は優秀そう。家族を説得させられて泣きを見るのは目に見えているが」

「羨ましいけど。あれだけ補佐官に慕^{した}われるつのも」

「そうだな。だが、アレは少し暑苦しそうだ」

「あははっ。じゃあ、カリユ、この機会に丁度良いのを探さないと」

「それを言うならセルジュもだろう」

「あゝ、フィルにも言われたしね……」

セルジュとカリュエルにとってもこの場はいい機会だ。将来の相棒を見つけられる場であるとフィルズからも言われていた。同じようにリサーナとユゼリアも、この会場でそうした人を探すのが今日の課題だった。

そうして二人は周りを気にしていたから、慕われる上司と補佐官達の話を目にして興味を持ったのだ。

「でも、クルファイがいるしな」

「私も、トマがいれば十分なんだが……」

《好きに選ばばよろしいのです。使えなければ私が鍛えます》

《私共のことに文句は言わせませんが、やはり、主と同じ『人』である者が側にいるのは大事なことから》

「ええ……」

この場には、付かず離れず、魔導人形のクルファイとトマがいる。既に学園生達にはその存在が周知されているし、その子ども達から親にも伝わってはいるが、初見の者達もいる。敢えて連れ歩き、周知させるいい機会だった。

《面倒くさがらず、話してきてください。まずは見た目で選んでもいいですから》

「え？ 見た目で？」

《感じ悪いやつは、見た目で分かるでしょう》

「あ、分かるかも」

これがクルファイとセルジュの会話。それにトマとカリュエルの会話が続く。

《主も同じようにどうぞ。人とは、話してみなければ分からないところもございますので》

「うん……そうだね」

《目星を付けるだけでもよろしいですよ。後は我々が調べます》

安心してくれと、カリュエルを見つめるトマ。一方、これに同意したクルファイも口を挟む。

《そうです。家族の問題から友人関係まで全て、余すことなく査定いたしますので》

「それ……厳しくない？」

「決まらない気がしてきた……」

《妥協はできません》

《当然でしょう》

うんうんと魔導人形二体が頷き合う。結局はこの二体のおめがねに適わなければならぬようにだと、少し気が楽になるような、重くなるような、微妙な思いを感じながら、二人は会場を歩き出した。

この時、まだ王への挨拶は続いている。

卒業生一人一人というのは、とても時間がかかる。

「叔父の愚行を止められなかったことを謝罪すると共に、新たな家門を継ぐ者として誠心誠意尽くして参ります」

「期待している」

「はい！」

ファスター王だけでなく、多くの貴族達も注目しているのは、本来ならば当主になるはずのなかった者達が、新たな当主となることもあるからだ。

「おや。あの子は……騎士になる子ではなかったかな」

「本当だっ。騎士達が期待していた子では？」

「家を継ぐことになったようですねえ」

「なんてことだ……」

「是非養子に迎えたかったのだが……」

将来有望と見ていた者達も、予定とは違った道に向かっていく場合もある。

女性達も、嫁入りするはずだった家がなくなってしまうたり、逆に婿入りしてもらわなくてはならなくなったりと戸惑ってしまった。

「夫となる者と共に、これまで苦しめてしまった領民達へ、誠意を持って向き合ってください」

「風当たりは強いだろうが、頑張ってください」

「努力いたします」

それでも、彼女達は強い。一年にも満たない時間ではあったが、セイスフィア商会で学んだことは生かされており、何より精神面でも強くなった。

もちろん、それだけではない。護身術を教えたことで、体を動かすことに目覚めた令嬢達が一部存在した。

「わたくしは、騎士を目指したく思っております！ この国のため、そして、女性の新たな道を作るため、精進して参ります！」

「う、うむ……ご両親ともよく話し合ってください。だが、期待している」

「はい！」

こんなことを言うと思っていたいなかった両親達がひっくり返っているが、騎士や冒険者になると宣言した令嬢達の表情は輝いていた。

「わたくしは、可能ならば文官の試験を受けたく思っております。女性達が生きやすい世の中にすれば、今よりもっと、子ども達はすくすくと育ちましょう。男性では拾えない女性の声を、王宮に届けたく思います」

「確かに……民の半分は女だ。その半分の意見を聞かぬのはおかしい話だな。女性文官の採用、よく考えよう。次の議題にのせることにする。待っているといい」

「っ！ ありがとうございます！」

少し前ならば、頭の固い者達が、生意気な、と悪態をついただろう。だが、風通しも良くなり、自分さえ良ければと考える多くの者達が減ったことで、今年から女性騎士の採用が始まった。それならば女性文官も、との意見もこうして通りつつあるのだ。

「なんとつ。勇氣ある令嬢だ」

「ええ。ええ。あのように陛下の前で堂々と……令嬢達がなんとも眩しいことだ」

「セイスフィア商会で色々と学んだようですなあ」

「あの騎士を目指す令嬢は、この前、悪漢をノしておりましたぞ。見事な身のこなしで、うちの次男坊が見惚れておりました」

「おやおや。堅物と有名な令息が、初恋ですかな？」

「ええ。そうです」

「はっはっはっ。いやあ、いいですなあ。あの辺も、先ほどの令嬢に見惚れておるわ」

「なんとも初々しいですなあ」

今まで女性に見向きもしなかった者達が、はつきりと自身の思いを口にし、自分で道を切り開こうとする令嬢達の輝きにやられたようだ。

婚約者はいるのかとか色々聞こえる。そして、そんな令嬢達に感化される女性もいる。

「……お父様。私……どうせ結婚できないなら、彼女達みたいに国に仕えるわ」

「っ、な、なんだって!? いや、いや、た、確かにお前は行き遅れっ、じゃないっ、ちよっと男運が

なかったただけだ。きっとお前が幸せになれる相手が……」

「相手がいないければ、私は幸せになれないとお父様は言いたいのか？」

「え……」

「だってそういうことでしょうか？ けど、結婚しても幸せになれるかどうかなんて分からないじゃない。なら、私はやりたいことをやるわ！ そのやりたいことで国の役に立ったら、きっと幸せだわ！」

キラキラと目を輝かせるその女性は、確かに年齢的には二十代も後半に入るといふ頃。ここには、結婚相手を探すために来たはずだ。未婚の男性達をチェックし、その人達と交流するつもりだっただろう。

「そ、それは……」

「私、あの子達とお話ししてくるわ」

「え？ ちよっ……」

「あなた。いいではありませんか。あんな生き生きとしたあの子を見るなんて……何年振りかしら……」

「っ……そうだな……孫は……諦めるか……」

「あら。まだ分かりませんわよ？ ですが、無理に作るものでもありませんもの。案外、思わぬタイミングで結婚を決めてくるかもしれないませんか？」

「そ、そうだな……」

男親は心配そうだが、夫人達はかなり肯定的だ。女性だから分かるものもある。

「……私もやってみようかしら……」

「え!？」

「だって、あなたも王宮で働いているでしょう？　一緒に仕事場に向かうとか、楽しそうだわ」

「っ、一緒に出勤……っ」

「娘も手を離れていますし、平民はそれが普通ですわよ？　子育てが済んでから、働きに出るとい

うのは。それが好きなことなら、尚よしですわねっ」

「う、うん……一緒にか……っ、うん。いいね!」

「ふふふっ。もう一度学び直すのも楽しそうですわ」

「そうだねっ。分からないところがあつたら教えるよ!」

「まあっ」

なんだか夫婦仲が良くなるところもあるようだ。

そして、そんな中、ようやく最後の卒業生の挨拶が終わり、リュブラン、マグナ、フィルズが呼ばれた。

宰相であるリゼンフィアが喉の調子を確認してからマイクを手を持つ。嬉しさと誇らしさでニヤ

ケそうになるのを必死で堪えながら口を開いた。

「次に。初の特例での学園卒業認定試験合格者。三名、前にっ」

リュブランとフィルズ、マグナはゆったりとした歩みで、王の前に進み出た。

「今回は初ということで、特別に陛下よりお言葉をいただく」

これからは、平民もこうして特例での試験が受けられるようになるため、今回、それも想定したやり方となっている。

さすがに貴族の子ども達のように、王の前で挨拶をするなどということはさせられない。平民にとっては罰ゲーム並みに困ることではないのだから。

もちろん、卒業資格の取得には王宮で働くことも視野に入っているため、貴族に対する挨拶の仕方などのマナーや、爵位を含めた貴族の教養も実技試験に組み込まれている。よって、平民出身の者でも挨拶できないというわけではない。

フィルズやリュブラン、マグナは、きちんと王の前で横一列に並んで膝をつき、頭を下げていた。こればかりは決まりのようなものだ。無視はできない。寧ろ、ここでこれができなければ、王宮に上がった時に周りからの『常識がないんだな』という蔑みの視線を避けられなくなってしまう。

因みに、フィルズ達が呼ばれたこの瞬間から、広場に用意された巨大スクリーンやセイスフィア商会のモニターには、今この場の映像が映っている。

「今この時、この場を民達も見ている。リュブラン」



「はー」

「卒業認定取得おめでとう。そして、すまなかった……」

「……え……」

民達もこれにはボカンとする。王都の住民達は、リュブランが第三王子と知らない者が大半だった。

「息子であるお前を、私は一度捨てた……お前は折れず、真っ直ぐに国のことを考えてくれたというのに……我が息子リュブランに、成人後、元キートル領を与える。現在は伯爵位だが、正式に家門を継いだなら、公爵家とする！」

「……おおっ……」

ざわりと空気が振動した。民達も、驚いているようだ。そもそも、リュブランが第三王子だということに驚いている者も多い。

「次にマグナ」

「はー」

「卒業認定取得おめでとう。お前にも苦勞をかけた。そして、リュブランを支えてくれたことに感謝する。冒険者三級も近いと聞いている。是非とも騎士となる道を選んで欲しい。だが、無理強いはない。成人後は子爵位を授ける。望むならば、家門の再興も認めよう」

「ありがとうございます」

マグナは常に補佐に甘んじていたため、どのような人物なのか、誰の子なのかも気にされていなかった。そのため、今になって貴族達が騒めいた。

「誰だ？」

「マグナ……マグナ？ 聞いたことがあるような気もする……」

「ああ。アレだ。公爵領になった、辺境伯領の隣の元男爵家の子だ。まあ、見た目がかなり変わったようだがな」

大人達が冷静に現状の把握をする一方、子息達が目を丸くしていた。

「っ、まさか、あのデブ!?」

「おい。何を言って……あ……ま、まさかっ」

以前のマグナの姿を知っていた者達もいるようだ。そうした者達の大半は、驚愕していた。

「背、背の高さが……全然違う……」

「うそよ……」

震えるほど衝撃を受けているのは、女性が多かった。

「わ、わたし……婚約のお話を、もらったことが……っ」

「わ、わたくしも……」

これが理由のようだ。惜しいことをしたということなのだろう。

「……はあ……今のお前では、釣り合わぬな」

「諦めなさい。あれほどの言葉を陛下からいただく青年など、無理だろう……」

そんな女性達の父親達は、諦めさせる方へ動いた。一度断った縁談だ。そして、その時は父親や母親達も、自分の娘とは釣り合わないと思っていた。今や逆の意味で釣り合わない。

「三級間近か……素晴らしい才能があるようだな」

「あの体付き。あの年では恐れ入る」

「是非ともうちの騎士団に！」

「お前……すぐに抜かれるぞ」

「え……」

騎士達の目は期待に満ちたものが多かった。今やマグナをバカにする者はどこにもいない。

「次に、フィルズ」

呼ばれたフィルズは、ゆつくりと顔を上げた。

今回のフィルズは祖父リーリルによる「作品」だ。リュブランとマグナのもそうだが、服はセイフイア商会の服飾部門を統括するリニが作り上げたもの。

フィルズの服は髪と同じ濃紺。それも特別な布だ。夜空をそのまま映し取ったような少し光沢のある深い青。これは流民の特別な織布しよくふを使っている。縁取りなどは銀色でされており、色に派手さはないが、とてもキラキラしいものになっている。

因みに、リュブランは全体的に白でまとめられ、マグナは黒だ。どちらも見る者が見れば良いも

立ち読みサンプル
はここまで

のだと分かる生地を使っていた。細かいボタンや装飾までこだわって作られている。

フィルズの髪型はいつかの茶会での王子仕様だ。少し髪は伸びているが、それがまた中性的な雰囲気醸し出していた。

「フィルズ……エントラール。あの学園の試験は数年前に見直され、昨年また、選民意識の高かった元学園長を追い出したことで、更に難問も増えたと聞いているが……満点の合格。見事だ」

「ありがとうございます」

「あ、ああ……その……いつも通りにならんか？」

「陛下……」

リゼンフィアが思わず小さな声で窘める。

フィルズが少し雰囲気も王子様仕様に変えたことで、ファスター王は我慢できなくなったらしい。威厳ある王の態度でフィルズの前にいるというのが恥ずかしいようだ。

ファスター王は片手で顔を覆い、一つ頷いてから立ち上がると、真面目な顔で言った。それも、フィルズではなく貴族達に向けて。

「彼は私の相談役でもある。そして！ 三級冒険者だ！」

「「「三級っ!？」」」」

「本当になられたと……」

「あの時はまだ近々三級と言っていたが……そうか」

「あの年齢で？ まだ未成年でしょう？」

「最年少の三級冒険者が出たというのは、彼か……」

一部の貴族達は見覚えがあると感じつつフィルズを見ていた。多くの貴族が粛清された公開審判の日は、フィルズもその場に居合わせたものの冒険者の格好であったため、今日の王子仕様を見てすぐにピンと来なかったようだ。

この場の貴族達だけでなく、映像を観ている民達も驚いている。しかし、そこでフィルズは雰囲気を変えてニヤリと笑い、胸ポケットから冒険者証を出してファスター王に見せた。

「っ！ なっ、ちよっ、待て！ フィル!? それは！ 二級証ではないか!?」

「ここに来る前にもらったので」

「なんで言わない!?」

「聞かれなかったから？」

もう神秘的な雰囲気は消えた。お茶目に首を傾げて見せるフィルズに、ファスター王は頭を抱えた。

「合格したのか……」

「フェザーコッコを狩った」

「っ！ 存在するのか!?」

「辺境の山の頂上に。かなりいたから間引いてきた。唐揚げにすると美味いかなと」